

# イギリス女子身体教育の日本への伝播

—— 下田歌子と安井てつの視察・留学を中心に ——

香川 せつ子

(津田塾大学言語文化研究所)

## はじめに

明治以降の日本の教育は、理論と実践の両面で西洋式学校教育をモデルとして発達した。本稿が着目するのは、西洋モデルの女子教育が文部省により制度化されるのとは別の経路が女性の海外渡航を通して開拓されていたことであり、その背景と経緯を、イギリスの女子身体教育とその日本への伝播という事例を通してみていく。19世紀後半におけるパブリック・スクールや大学での男子スポーツの盛況は多くの外国人を魅了したが、日本から訪れた教育者たちも例外ではない。その一方で、19世紀末に女子教育視察を目的に渡英した教育者たちも、女性の間広がるスポーツ人気と女子学校での身体活動に目を見張り、日本への導入の必要性を主張した。

イギリスを発祥地とするスポーツの世界的波及については、中村（1993）、阿部（2009）、坂上他（2018）等、体育・スポーツ史家による研究の蓄積がある。近年では、池田恵子が、スポーツと帝国という枠組みのもとで、ジェンダーの視点から、イギリスの身体文化と日本への影響を精力的に論じている（Ikeda, 2010, 2014a, 2014b）。そこでのハイライト、エリザベス・ヒューズの来日と体育奨励については、木村（1973）、高橋（1993）もスウェーデン体操の先駆的な紹介例として言及していた。池田の論考では、日英スポーツのトランスナショナルな関係に着目し、国家主義と良妻賢母思想の影響が考察されている。

他方、日本における女子体育の歴史は、上沼（1967）、女性体育史研究会（1981）によって開拓され、近年の掛水（2018）の女子体育教師研究へと継承されている。また、欧米女子身体教育の日本への伝播に関する研究として、西村（1978, 1979, 1983）が、井口あぐりと二階堂トクヨ等の米英留学を考察している。

本稿が着目するのは、文部省による井口や二階堂の欧米派遣以前の時期に、女子教育法の研究を目的に渡英した教育者たちが、身体教育の日本への導入を説いたことである。なかでも本稿では、1890年代に女性教育者として初めてイギリスに留学した下田歌子（1854～1936）と安井てつ（1870～1945）の言説と実践を中心に論じる。下田と安井が渡英後に体育を奨励したことは、藤波（2012）、曾我他（2015）の論考でそれぞれ言及されている。しかし、これら日本体育史の研究では、下田や安井が見聞したイギリス女子体育の状況に関する考察はなく、彼女らによる体育奨励の背後にある女子教育観の変化について教育史的な分析はなされていない。1890年代のイギリ

スで女子の身体教育がなぜ盛んとなったのか、下田と安井はイギリスの身体教育をどう観察し、日本に導入することの有益性をどう把握していたのか。本稿では、これらの問いを追求するなかで、イギリス女子身体教育が、女性教育者のトランスナショナルな移動を通して日本に紹介され、異なる社会的文化的環境での適用と移植が図られた過程と論理を考察したい。

## 1. 19世紀末におけるイギリス女子身体教育の隆盛

### (1) 女子教育への身体教育の導入

近代スポーツの揺籃の場がパブリック・スクールや大学であったのは、周知のことである。クリケットやラグビー、サッカー等の団体スポーツ競技は、身体の機敏さだけでなく、男らしさ、忍耐力、協調的集団精神、フェアプレイの精神の育成に資するとみなされた。身体強化と人格陶冶を結合させたアスレティズムは、学業、寮生活と並ぶジェントルマン教育の一環であった(村岡、1987)。他方、家庭の場で、母やガヴァネスからレディとしての嗜みをしこまれた上流中流階級の少女たちには、不自然な作法と運動不足からくる虚弱体質や生理不順、脊椎湾曲の是正のために、軽微な美容体操が奨励された(香川、2011)。スポーツが女性に普及するのは、1870年代以降の近代的女子教育を通してである。

19世紀後半に女性の身体強化に関心が高まった理由のひとつは、大都市を襲ったコレラの大流行による国民の健康不安である。1848年の公衆衛生法による都市環境改善と同時に、栄養や運動による体力増強が課題となった。衛生知識の向上と健康教育の必要が叫ばれ、1870年の初等教育法を契機に労働者階級の子どもへの身体訓練が始まり、鍛錬と集団規律への馴化を目的とするドイツ式兵式体操が導入された(McIntosh, 1968)。中流階級女性の身体に対するまなざしも変化し、優美さなどの社交的装飾の側面から、子どもを産み育てる「母体」としての側面へと価値観がシフトした。その背景にあったのはソーシャル・ダーウィニズムの「適者生存」の思想であり、生殖の優劣が種族の存亡を左右するという優生思想であった。ハーバード・スペンサー(Herbert Spencer, 1820-1903)は、『生物学の原理』で、女性が妊娠、出産、授乳、子の養育に耐える身体をもつことを重視し、少女たちの運動不足に警鐘を鳴らす一方で、精神や頭脳の緊張もまた生殖機能に弊害をもたらすと論じた(Spencer, 1867)。さらに南アフリカ戦争時の兵役検査における不合格者の大量出現は、大英帝国の将来への不安を増殖させ、強健な子どもを産み育てる女性の身体管理が国民的課題となった(Dyhouse, 1976)。

こうした社会情勢を背景に、女子教育のパイオニアたちは、大学やパブリック・スクールをモデルに、スポーツを教育活動に取り入れた。スポーツや身体運動は、高度な学問や試験に伴う精神と頭脳の緊張を緩和する手段でもあった。例えば、フランシス・メアリー・バス(Frances Mary Buss, 1827-1894)によって1850年に設立されたノース・ロンドン・コリージェイト・スクールは、生徒の知的教育に力を入れて学外試験に挑戦させた。受験勉強による心身の負担への配慮から、ドイツ式体操やダンベル体操、バドミントン等の競技が導入された<sup>1</sup>。他方、チェルトナム・レディーズ・カレッジの校長ドロシア・ビール(Dorothea Beale, 1831-1906)は、知性と信仰心の涵養という教育理念から競争スポーツには批判的であり、歩行や乗馬を推奨した。しかし、1890

年代に入ると、スポーツは「他者との共同活動や即座の判断力を開発する」とその意義を再考し、ホッケーなど多様なスポーツを導入した<sup>2</sup>。

ケンブリッジ大学とオックスフォード大学の女性カレッジでも、スポーツはアカデミックな学業課程を支える「課外の活動」として摂取された。ガートン・カレッジの創立者エミリー・デイヴィス (Emily Davies, 1830-1921) は、女性が男性と同一の大学教育に耐えうる知的能力をもつことの証として、優等学位試験での合格を目標とした。スポーツはレディの規範を逸脱しない範囲で奨励され、テニスやクローケーが人気を博した。1883年にはオックスブリッジの4つの女性カレッジ間での対抗試合も開かれている (McCrone, 1986)。

19世紀末になると、ソーシャル・ダーウィニズムの影響を受けて、身体教育を教育課程の中核に据える女子学校も出現する。例えば、1885年にスコットランドで設立されたローディン校は、「身体的、知的、道徳的に徹底した教育を授けること」を目標に掲げ、毎日2〜3時間を戸外エクササイズや競技に充て、水泳、乗馬、ダンス、体操を実施した<sup>3</sup>。フランシス・ダブ (Jane Frances Dove, 1847-1942) が校長を務めたセント・レナズ校では、ゴールズやテニスのハウス対抗戦が行われ、1891年にスウェーデン体操、1895年にはホッケーが導入された<sup>4</sup>。スポーツ信奉者ともいべきダブは、1896年に創設したウィコム・アビー校を「正真正銘のパブリック・スクール」として、女性を「善き市民」に育成することをめざした。「幅広い関心、規律と組織、団結心 (*esprit de corps*)、集団的行為の力」を養うために、「運動場ほどに完全な場所はない。クリケット、ホッケー、ラクロスなど大人数で組織性のある競技が、この目的に最もかなう」と主張している<sup>5</sup>。

女子学校における身体教育へのニーズ拡大を察知して体育専門教師の養成に着手したのが、マルチナ・バーグマン＝オスターバーグ (Martina Bergman-Osterberg, 1848-1915) である (May, 1968, 1969)。スウェーデン出身の彼女は、ストックホルムの王立中央体操学校 (the Royal Central Gymnastic Institute) で教師資格を取得したのち、イギリスに渡ってスウェーデン体操普及の立役者となり、後述するように日本の女子体育にも影響を与えた。

## (2) スウェーデン体操の導入とオスターバーグ・カレッジの設立

工業化の遅れによって列強諸国からの軍事的脅威に晒されたスウェーデンでは、1813年という早い時期に王立中央体操学校が設立された。同校で医師リング (Per-Henrik Ling, 1776-1839) が解剖学と生理学に基づく科学的運動として開発したスウェーデン体操は、教育体操、軍事体操、医療体操、芸術体操という4領域で構成された。王立中央体操学校は軍事体操と医療体操に力点を置く男子校だったが<sup>6</sup>、1864年に教育体操と医療体操に限定して女性の入学を許可した。1881年に同校を卒業したオスターバーグは、ロンドン学務委員会から初等学校の身体教育に関する女性監督官 (Lady Superintendent of Physical Education in Girls and Infant Schools) に任命されて渡英した。男子向けのドイツ式兵式体操に代わる女子向けの運動として、高価な設備や道具なしに行えるスウェーデン体操が注目されたのである。オスターバーグは、初等教師向け講習会や1884年の万国衛生博覧会での女子児童の実演等の宣伝活動を通して、労働者階級の子どもへのスウェーデン体操の普及に成果を挙げた。

他方でスウェーデン体操は、生理学に基づく医療的教育的特質から、中流階級の少女たちの虚弱体質や脊椎湾曲を改善する方法としても有効だった。そこに着眼したオスターバーグは、スウェーデン体操を中流階級女子教育に導入することをねらい、1885年に女性体育専門教師を養成する学校、通称マダム・オスターバーグ・カレッジ (Hampstead Physical Training College and Gymnasium、創立時からの名称は一定していない。以下では、「オスターバーグ・カレッジ」と略称する) を、ロンドンに設立した<sup>7</sup>。オスターバーグ・カレッジは中流階級家庭の少女たちを身体教育の専門家とすることを目的とし、校舎や寄宿舎、校庭などのキャンパスは既存の女子学校をモデルに設計された。少女たちの全人格的教育が教育目標に据えられ、解剖学、生理学、スウェーデン体操の理論と実習に加えて、テニスやファイブズ等のスポーツも教育内容に含まれた。スウェーデンの王立中央体操学校で発達した体操教育を、文化的土壌の異なるイギリスで、中流階級女性向けに改変して適用したオスターバーグ独自の身体教育戦略である。

オスターバーグによる全国主要都市での実演が功を奏し、1880年代末にはチェルトナム・レディーズ・カレッジやセント・レナズ校などの寄宿制女子パブリック・スクールが、スウェーデン体操を導入した。リーズ、リヴァプール、ヨーク等イングランド北部やスコットランドに設立された通学制女子ハイ・スクールも同様である。創立から1915年までのオスターバーグ・カレッジ卒業生の就職先リストには、これらの女子中等学校のほか、ケンブリッジ大学のガートン・カレッジとニューナム・カレッジ、ケンブリッジ・トレーニング・カレッジ、スコットランドのセント・アンドルーズ大学とグラスゴー大学、ウェールズのカーディフ大学等が名を連ねる<sup>8</sup>。なかでもエリザベス・ヒューズ (Elizabeth Phillips Hughes, 1851-1925) が校長を務めるケンブリッジ・トレーニング・カレッジは、女子中等学校教師養成のためのカレッジであり、安井てつこの留学先でもあった (Hirche and McBeth, 2004)。後述するように、ヒューズと安井はオスターバーグによる身体教育の日本への紹介者となる。

女性校長協会 (Headmistress Association) の会長を務めたセーラ・バーストール (Sara Burstall, 1859-1939) は、『イングランドの女子ハイ・スクール——その目的、組織と経営』(1907) で、女子身体教育の発達をヴィクトリア時代の特徴として強調している。

戦時における身体適合検査に耐えうるために、この国の男性にとって重要なのは身体の強壮さと活動力——動的なエネルギーである。女性の生命力と受動的な力——潜在的エネルギー——は、もっと重要である。なぜならば、自然は女性を兵士の母となるよう命じているからである。これゆえに、知的にも、個人的にも、国家的にも、すべての理由から、女子ハイ・スクールは当初から少女たちの健康な状態を護り、身体に良いことを最大限に計画する責務を負っていた。競技スポーツや体操の女性に取り入れるのはこれらの理由からであり、それはイギリスの伝統である野外での生活を、上流階級の限られた人たちからあらゆる階級の人びとへと広げるのに役立った。——それはヴィクトリア時代の最も目覚ましい社会変化のひとつとなっている (Burstall, 1907, pp.90-91)。

## 2. 日本における女性のイギリス留学と女子身体教育論の登場

明治政府が女子教育振興に本格的に着手するのは、日清戦争後の1890年代後半である。1899年の高等女学校令によって各府県に高等女学校を設けることが義務化され、1903年の高等女学校教授要目で体操が正式教科のひとつとなった。女子教育の充実を西洋諸国に比肩する近代国家の要件とみなした政府は、文部省官費留学生として女子教育指導者の欧米派遣を開始した。1898年に安井てつを「家政学及び教育学」を目的としてイギリスに留学させ、1899年には下田次郎を「教育学並びに女子教育法の研究」のために欧米4か国に派遣した。また同年に井口あぐりを「女子の生理衛生体操科」を目的にアメリカに留学させ、1901年には宮川スミを「家政学」を目的としてイギリスに留学させている<sup>9</sup>。他方で宮内省は文部省に先立つ1893年に、華族女学校学監の下田歌子を皇女教育視察の目的で欧米に派遣した。これらの派遣実態が示すように、文部省は女子教育のなかでも、家政学と並んで保健衛生に関する教育に注目していた。その牽引役は女子高等師範学校校長でアメリカ留学の経験をもつ高嶺秀夫であり、1903年にはアメリカから帰国した井口あぐりを教授として、女子高等師範学校に国語体操科を設置した。ポストン体操学校で学んだ井口は、全国各地で現職教師対象の体育講習会を開催してスウェーデン体操の普及に努めた。井口の退職後の1912年に、教え子の二階堂トクヨが、「体操」を目的としてイギリスに派遣される（西村、1979）。

このように、明治政府が女子の体育強化に乗り出すのは20世紀初頭のことである。しかし、それを遡ること十数年、女子の身体運動の必要性を指摘する意見がイギリス留学経験のある科学者から提起されていた。辻岡文助編『高名大家女子教育纂論』に掲載された櫻井錠二（1858～1939）による「女子の躰育に就いて」は、日本で最初の女子体育論のひとつであろう（櫻井、1888）。櫻井は1876年からロンドン大学に留学し、親日派のアレクサンダー・ウィリアムソン（Alexander Williamson, 1824-1904）教授のもとで優秀な成績を収めてロンドン化学会会員に推挙された俊才であり、1881年の帰国後24歳で東京大学教授に赴任した。女子師範学校附属高等女学校での講演で「女子の躰育」を論じたのは、帰国後に日本人の体格の悪さを思い知ったことが動機である。彼は「西洋人は日本人に比してその身高くして骨格善きのみならず強壯なるはなかなか我々のおよぶところではありません。そしてその精神の活発なるも遙か我が日本の及ばざるところです」と語り、その原因を衣食住の違いと運動の多少に求めた。男子の体育は「既に多少世人の注目するところとなっている」が、「女子の体育と云うはまるで打ち棄てあるように思われます」<sup>10</sup>と批判し、イギリスではローンテニス、クローケーなどの遊戯（競技）、舞踏、水泳が女性の間で盛んなことを紹介している。櫻井は、人種改良と体位向上の観点から、女性が栄養や衛生の知識を身につけて衣食住を管理すると同時に、適度な運動によって健康増進を図る必要を説いた。

櫻井より約20年遅れて渡英した下田次郎（1872～1938）も、女性の身体強化を主張した男性の一人である。帝国大学大学院で心理学を学んだ下田次郎は、1898年に女子高等師範学校教育学授業嘱託となり、その翌年に女子教育視察を主たる目的にドイツ、フランス、イギリス、アメリ

カに留学して1902年に帰国した。留学中の見聞の成果を『女子教育』（1904）および『西洋教育事情』（1906）として刊行している。『西洋教育事情』は、下田が上記4か国以外に東欧・北欧諸国やロシアで視察した、小学校から大学まで多種多様な学校教育をまとめた800頁以上に及ぶ大著である。「英国の教育観」に関する記述の半分以上がスポーツ描写にあてられ、クリケット、フットボール、ゴルフ、ローンテニス、ホッケー、ボートレース、陸上運動等が紹介されている<sup>11</sup>。主著『女子教育』は、「女子の教育は其心身の研究から始めて、其特色に基づいて、帰納的に行わねばならぬ」という考えから、「第一篇女子の身体、第二編女子の心理、第三編女子の教育」という構成をとり、身体の研究は生理学、解剖学、人類学に依拠し、精神の研究は心理学に依拠するとして男女の性差を主張した。「第45章体育」では、スペンサーの説を引いて身体強化の必要を説き、体操、舞踏、ローンテニス、遊泳などイギリスで盛んなスポーツを奨励している<sup>12</sup>。

櫻井が留学中の1870年代後半は、上流中流階級の女性の間でテニスやクローケーなど社交的なスポーツが流行し、イギリスの女子中等教育で身体教育が定着しつつあった時期であった。他方で下田次郎が渡英した1890年代末は国民がスポーツに熱中し、身体教育が女子中等教育の中核をなした時期である。時代の様相は異なるが、櫻井は科学者としての眼から、下田は教育学の観点から、文明化の先進国西洋と比較して日本人の体格と体力の虚弱さに注目を促し、女子の体力増強と運動の必要性を指摘した。

### 3. 下田歌子の女子教育視察と体育への注目

下田歌子は1854（安政元）年に岩村藩士の娘に生まれ、独学で和歌や漢学の素養を身につけ、1872年に宮廷に出仕した。非凡な歌才を皇后から愛され「歌子」の名を賜り、学校行啓にも同行するが、8年後に宮廷を辞した。女官時代に知遇を得た伊藤博文や山縣有朋に勧められて桃天学校を開設、1885年の華族女学校開校に伴い教授として就任、1886年から学監として学校運営に采配を振るった（故下田歌子先生傳記編纂所、1989）。下田の欧米視察は、宮内省顧問皇女養育掛主任の佐々木高行の提言によるものである。佐々木は下田を皇女教育の最適任者と推薦し、近代国家における皇女教育の範を西洋に求め、下田の洋行を奏上した<sup>13</sup>。女子教育視察という目的のもとで現職教師が派遣された最初の例である。

下田は、1893年9月に横浜港を出発し、フランス、イギリス、ドイツ、オーストリア、スウェーデン、スイス、アメリカ、カナダといった欧米主要国を訪問して1895年8月に帰国する。そのうち1年半をイギリスに滞在して、上流中流階級の家庭教育を中心に女性や家庭、女子教育の在り方を観察した（下田、1896）。また、チェルトナム・レディーズ・カレッジやオックスフォード大学とケンブリッジ大学の女性カレッジ、ケンブリッジ・トレーニング・カレッジ等、当時のイギリスを代表する名門校をはじめ、地方の女学校や小学校なども隈なく訪問している。帰国後に刊行した『泰西婦女風俗』（1899）および『泰西所見家庭教育』（1901）には、彼女がイギリスで観察した女性や家庭のありさま、女子教育や学校教育、家庭教育の様態が詳細に記述されている。下田はイギリスの教育から多くの知見を得た。上流から下層まで様々な学校が発達していること、

また母親が家庭教育の責任を負っていること、あらゆる教育活動の基礎にキリスト教信仰があること、女子の身体教育に重きが置かれていることなど、西洋と日本の落差を目の当たりにして、教育の差が国力の差に直結することを痛感した（香川、2021）。皇室や華族など上流階級だけではなく、一般女性の啓蒙と訓練が肝要であるとの認識から、帰国後に実践女学校や女子工芸学校を設立し、良妻賢母教育の必要を多数の著作で提唱した。その柱としたのが、「心育・体育・知育・美育」である。下田は、欧州諸国のなかでもイギリスで特に体育が盛んなことを、大英帝国の植民地拡大と関連させて、次のように語る。

体育の<sup>ゆるが</sup>忽せにせず可からざる事は、欧米各国至る所に之を唱へて、且つ之を助長セリ  
就<sup>なかんづく</sup> 中英国の民は男女上下を通じて最も此点に重きを置くこと、また多邦に越ゆるの評あり。  
すなわち彼の国の領地、殆ど世界全州に跨りて、所謂大英帝国国旗の影、常に日没を見ずと  
誇れるに至れるだけ、其領土に、わが民種を蕃殖せしめんとするは、勢ひ厳寒酷暑にも耐ふ  
べき健康の身体を作らざる可からざる道理（下田、1901、p.153）。

女子学生が学業の合間にスポーツを楽しみ、女子中等学校では身体運動が教育課程に位置づけられ、さらに上流中流家庭ではローンテニスが社交手段となっていることに、下田は驚いた。『泰西所見家庭教育』では、女子の体育を「学習的体育」と「遊戯的体育」に分類して、両方がスポーツの人気に貢献していると観察する。「学習的体育」とは学校の正課として教えられる体操やダンスを指すが、「子女が学校にて学び覚え体操の、その家庭に於いても練習し得られるものは勤めてこれを試みしむる場合、極めて少なからざるなり」と述べて、学校での体育が家庭の日常生活に浸透していることを強調した。「遊戯的体育」は、ローンテニス、クローケー、ダンス、徒歩、乗馬や戸外への遠足などであり、イギリス女性の活動力と行動範囲の広さは日本とは比較すべくもなかった<sup>14</sup>。

子女が談笑遊戯の間に於いて知らず知らず体育の発達を図らんとするは、彼の国一般の傾向なるが故に、遊戯の種類は大抵智徳体美の教育に裨益あらしむべき程の仕組なりと云うも不可なかるべし。殊にこれを好むは英米両国の民と聞く。故に甲乙ともに女子の活発に過ぎて、就中中米の如きは寧ろその中庸に過ぎたりとの評ある程なれども、また一方よりいえば、これ国歩の進歩、民力の強大を來たしたる所以にて、百般の事、積極的の方針を取るものは、多少の困難ありと云えども、遂に夕社の地位に立ち、消極的の方針に傾くものは、よし幾多の良計好機あるも到底優者の地位を領しうること難かるべし。これ、大いに、彼れを見て、是に考ふべき事ならん（下田、1901、p.163）。

「体育の発達」が「国歩の進歩、民力の強大を來たしたる所以」ととらえ、多少の困難は覚悟で積極的に取り入れるべきという進言である。「体操」は1903年の高等女学校教授要目で教科となるが、一般国民には伝統的婦徳に反するとの抵抗が強かった。帰国後に下田は、帝国婦人協会の機関誌『日本婦人』に「女子の体育に就きて」を寄稿し、学校での女子体育に対する社会や家

庭の理解を求めている<sup>15</sup>。

彼我相ひ俟ちて、ますます能く、女子体育の實踐を奨励せしむるに至り、強健なる母の、多数を占むるに至らば、国民全軀の強健を計る、何の難き事か是れあらん。……国家改造を説く人、請ふ先づ、これが淵源たる、女子体育に就きての注意を、興起せられんことを（下田、1904、p.3）。

「国家強健ならんことを欲せば、まず強健なる母を作るべし」と、女子体育の意義を国力増強の観点から主張する下田の論調は、彼女自身の国家意識に加えてイギリス留学の経験が影響している。渡英直後に勃発した日清戦争によって噴出した下田の愛国心は、大英帝国の栄華を象徴するかのような国民のスポーツ熱を目の当たりにすることでさらに高揚した。日清戦争後の日本がさらなる国力増強を図り、国民の体力強化と女子教育の充実政策を進めるなか、華族女学校や地方の女学校で体育普及活動に取り組んだ（藤波、2012）。1904年に日露戦争が勃発すると、『婦人衛生雑誌』に「戦時に於ける女子の體育に就て」を寄稿し、体育を「忠君愛国」の教育と結合させて論じている。「体育」と「心育」は非常に密接であるとして、「戦時になりますと、體育盛んにしてどうしても身體の健康を益々増進しなければならぬ」ことの認識が広がり、「東京は素より各地の女学校の模様を聞きましても、どうしても、體育はもっと盛んにしなければならぬ、もっと體育は進めなければならぬと云うことが益々声を高められて参ります」と指摘して、女学校における体育強化の緊急性を力説した<sup>16</sup>。

#### 4. 安井てつの留学と体育の奨励

安井てつは1890年に高等師範学校女子部を卒業後、女子高等師範学校（旧高等師範学校女子部）助教諭となり、岩手県尋常師範学校への赴任を経て、1894年に女子高等師範学校訓導に任じられた（青山、1949）。1896年に文部省から「教育学、家政学研究」のため3年間のイギリス留学を命じられたとき、安井は27歳、教職について6年目であった。1897年4月よりローチェスター・ハイ・スクールで家政の研究をして授業を参観するが、その内容とレベルに失望して、10月からケンブリッジ・トレーニング・カレッジに移り、教育の歴史・理論・実践に関する講義を受講した<sup>17</sup>。またユニバーシティ・デイ・トレーニング・カレッジやオックスフォード大学で心理学を学んでいる。ケンブリッジでの学寮生活と校長エリザベス・ヒューズとの出会いから、教育の根本が「キリスト教を基礎とする人格教育」であることを悟り、自由と自律を尊重する教授法に感銘を受けた（柴沼、2012）。

ウェールズ出身のヒューズは、チェルトナム・レディーズ・カレッジでの教職生活を経てケンブリッジ大学のニューナム・カレッジに進学、1884年に道德哲学の優等学位試験に合格してケンブリッジ・トレーニング・カレッジの初代校長に就任した。同カレッジの目的は、大学で高度な学問を修めた女性が、教育学や教授法を身につけて女子中等学校の教壇に立つことである。上述したように、ヒューズは、オスターバークとの出会いを契機に、スウェーデン体操を同カレッ



ジに導入した。ヒューズ自身も戸外活動愛好家であり、アルプス登山をはじめ、北欧、南欧、アメリカに旅行と視察に訪れた。安井はヒューズの旅行や登山に同行し、人格教育の一環としての身体教育の意義を知った。

安井は留学中の1899年に『東京茗溪会雑誌』で、イギリスの女子教育や校長ヒューズの略歴を報告している。そのうち「女子に適当なる体操法及び体育」については、ヒューズがストックホルムの「中央体操練習所」（王立中央体操学校）で授業を参観したというスウェーデン体操が紹介され、また男子校で盛んな「遊戯」（スポーツ競技）が女子学校でも行われ、「英国女子の体格健康は、体育の進歩によりて著しく進歩した」と書かれている。また女子学校では勉学における過労を防ぐために、毎日2、3時間の戸外運動が行われるとの記述もある<sup>18</sup>。

ヒューズはケンブリッジ・トレーニング・カレッジ退職後の1901年10月に来日し、1902年11月までの滞在中、高等師範学校や帝国教育会等で講演を行い全国の学校を視察した（大野、1989）。教育雑誌や家庭雑誌に掲載されたヒューズの講演は、教師を対象に教授法の原理や、英語、図画や体育の指導法を伝授するものと、イギリスの家庭や女性の生活を紹介するものがあり、後者は『家庭の模範』として刊行された（ヒューズ他、1902）。イギリス女性に盛んなスポーツ、遊泳や登山、旅行を紹介したのは、家庭に閉じこもる日本の女性に対して外の世界での活発な行動を促す意図があったと推察する。

大日本女学会発行の雑誌『をんな』に掲載された「女子の身軀操練（上）（下）」で、ヒューズは「女子の躰育は当今最も肝要なる教育問題の一なり」と指摘し、女子の知育の進歩によって身体の訓練に一層多くの注意が向けられていること、また近代生活のストレスにより健全な娯楽と戸外遊戯が以前にもまして求められていると述べ、生徒の心に適い、教師からみて価値のある運動として「体操」と「遊戯」を挙げる<sup>19</sup>。前者では児童教師の発達を知る熟練した教師のもとで行われるスウェーデン式体操を、後者では「自由と自治とは遊戯をして最も多く快楽を得、最も多く教育的効果を収めしめん」として、テニス、バスケットボール、ホッケー、クリケットを奨励している。しかし、ヒューズが「完全なる女子身体操練」としたのは登山であり、山々に恵まれた日本の地形を活用して「清新爽快なる高地の純粹なる精霊」に触れることを勧めた。『婦人衛生雑誌』に掲載された「登山について」では、登山が健康と精神にもたらす効用を、頂上に達するまでの骨折りや新鮮な空気を吸うことなど6点にわたって説いた<sup>20</sup>。

安井はヒューズの身体教育観を踏襲し、日本に女子体育を導入する必要を主張した。雑誌『をんな』での論説「女子の躰育」で、安井はイギリス留学中にスウェーデン体操に接した驚きを語っている<sup>21</sup>。

予嘗てスエーデンマの体操女教師が数十名の妙齡女子を集めて、体操を教えるを参観せしことあり。其術恰も男子の器械体操に異ならず。予が如き東洋女子の眼には、一見して以って其の外観に驚き、女子には不適當なりと叫ばしむべしと雖も、試みに彼等の身軀を検査するときは、其各部の能く平等に発達せる、其血色の清麗にして、其歩行の自由なる實に優雅なりと稱えざるを得ざらしむ。故に女子をして真に壯健快活ならしめんと欲せば、彼等の筋肉をして一層強固ならしめ、神経をして過敏ならしめざるにあり（安井、1902、pp.3-4）。

渡英前の安井は、男子の兵式器械体操は知っていたものの、女子が体操する光景は想像さえしていなかった。体操による訓練の効果が、身体の均整のとれた発達、顔色の良さや行動の優美さとなって表れていることを現地で観察したことによって、安井は、女性の心身の健康に運動が不可欠という認識に至った。イギリスでは、「運動が男女老幼を論ぜず英国一般の大いに興味を有する所にして、彼のフットボール、クリケットの如き大中小學の生徒より労働社會の工夫に至るまで熱心にこれを楽しむが如き、又婦人令嬢がテニス、クリケット等無上の快樂を取るが如き」<sup>22</sup>と描写して、女子体育の社会的、国家的意義を主張している。

女子をして自由に其精力を發達せしむることは獨其身軀をして壯健ならしむるのみならず、神經的感情的の性質を鈍からしめ、延きては其偏狭なる興味をして普遍たらしめ、大いに公共心を發揮せしむるの助となるべし。嗚呼国家多事、強健なる國民を將來に切望するの今日、それが母たらんとする我國少女の健康豈輕視することを得べけんや（安井、1902, p.5）。

イギリス留学で得た個人の自由と公共心を尊重する精神は、安井の愛国心と矛盾しなかった。スポーツと運動への熱烈さが大英帝国意識と一体であったように、安井は日清戦争後の日本の国力増強を女性の身体強化と結合しており、その点で先にみた下田歌子と共通している。

安井はイギリスから帰国後に女子高等師範学校教授に昇任したが、3年後の1904年にシャム皇女学校への赴任を命ぜられて日本を離れた。その後女子高等師範学校を辞してヒューズのいるウェールズに向かい、カーディフ大学で倫理学を学んだ。キリスト教信仰や自主自律を尊重する学風などイギリス留学で得た精神を教育実践に活かすのは、1918年の東京女子大学の開校によってである。学長に新渡戸稲造、学監に安井てつを据えて発足した同校では、キリスト教を基礎とする人格主義を基調に、「体育」を「実践倫理」「聖書研究」「英語」とともに各学年の必修科目とし、オスターバーク・カレッジで学んだ女子高等師範学校教授二階堂トクヨを非常勤教師に迎えた<sup>23</sup>。また1923年2代目学長に就任した際に、安井は、①キリスト教主義人格教育、②学生の体育に特に重きを置くこと、③Liberal College、④学究的生活と社交生活との調和という4つの教育方針を掲げている<sup>24</sup>。安井がヒューズの思想を踏襲して、女子の体育を身体のみならず精神の向上につながるものとして重視したことの表れである。

## おわりに

19世紀イギリスの身体教育は、階級と性差によって様相が異なった。上流中流階級のジェントルマン文化として発達した競技スポーツと、下層階級の身体訓練を目的とする兵式体操と、両者を混交した女子中等学校での身体教育とである。女子中等学校でパブリック・スクールにはない体操が実施されたのは、ソーシャル・ダーウィニズムの影響下、膨張する大英帝国を護る「兵士の母」となるための身体強化が要求されたからである。スウェーデン体操は、女性の生理と身体機能に配慮した医療的教育的体操法という点で女子教育のニーズに合致した。本来労働者階級

児童の身体訓練が目的であった体操を、イギリスの中流階級女性文化と混交したのが、オスターバーグである。オスターバーグ・カレッジは身体教育の専門的指導者を養成して女子中等学校と大学に送り込み、スポーツ競技とスウェーデン体操を二本柱とする独自の身体教育を浸透させることに成功した。下田や安井、ヒューズが日本に紹介した身体教育は、「体操」と「遊戯（競技）」で構成されるオスターバーグ流のものだった。

下田と安井の留学は、イギリス国民のスポーツ熱が絶頂に達した時期であり、女子学校や大学でのスポーツや身体教育の隆盛は、知的教育の充実とともに、西洋と東洋の文化と国力の差を如実に示していた。学校外でもテニスやゴルフ、登山や旅行を楽しむ女性の姿から、下田と安井は、身体活動が精神活動を活発化させることを察知し、日本の女性に身体教育を導入することの国家的利益を主張した。「女子の体育」に関する論調を比較すると、下田は国力への影響を重視し、安井は人格教育を強調しているように見える。二人の思想的立場や背景の違いが帰国後の実践にも反映されている。

さて、高等女学校での体操教育が定着した1912年、文部省は東京女子高等師範学校助教授二階堂トクヨを「体操」研究を目的にオスターバーグ・カレッジに留学させた。そこで二階堂が遭遇したのは、様式や規律・訓練を重視する日本の体操教育とは異なる、自由と自主自律を尊重し人格教育を目的とする幅広い身体教育であった。高齢に達したオスターバーグに対面する機会は少なかったが、その教育理念に共鳴した二階堂はオスターバーグを心の師として帰国した（二階堂、1975）。しかし、オスターバーグ・カレッジの教育の日本への移入には、教育的、文化的、社会的な面での衝突と葛藤があった。二階堂が東京女子高等師範学校を辞職して1922年に二階堂体操塾の設立に至る経緯と、彼女の留学経験が教育思想と実践に与えた影響については、稿を改めて論じることとしたい。

- 
- 1 *The North London Collegiate School 1850-1950*, London : Oxford University Press, 1950, p.46, 49.
  - 2 Avey, Gillian (2003), *Cheltenham Ladies : An Illustrated History of the Cheltenham Ladies' College*, James and James, pp.78-86.
  - 3 Zouche, Dorothy E. (1955), *Roadean School 1885-1955*, printed by private circulation, p.27.
  - 4 *St. Leonards School 1871-1927*, printed by University Press, Oxford, 1927, pp.78-98.
  - 5 Dove, Jane Frances (1898), 'Cultivation of the Body', in Dorothea Beale, Lucy H.M. Soulsby and Jane Frances Dove, *Work and Play in Girls' School*, London : Longman, Green and Co., 1898, pp.401-402.
  - 6 Lundavall, Suzanne (2015), 'From Ling Gymnastics to Sport Science : The Swedish School of Sport and Physical Sciences, GHI, from 1813-2013', *International Journal of the History of Sport*, vol.32, no.6, pp.780-789.
  - 7 May, Jonathan, M.Ed., (1968), 'The Bergman-Osterberg Physical Training College', in McIntosh, *Physical Education in England since 1800*, pp.287-296.
  - 8 May, Jonathan (1969), *Madam Bergman-Osterberg*, University of London Institute of Education, London : Harrap, pp.137-141.

- 9 辻直人 (2010)『近代日本海外留学の目的変容——文部省留学生の派遣実態について』東信堂、pp.225-402。
- 10 櫻井錠二 (1888)「女子の躰育に就いて」辻岡文助編『高名大家女子教育纂論』金松堂、p.70。
- 11 下田次郎 (1902)『西洋教育事情』金港堂→玉川大学出版部 (1973)、pp.95-166。
- 12 下田次郎 (1906)『女子教育』pp.237-240。
- 13 津田茂麿 (1928)『明治聖上と臣高行』自笑会、pp. 840-888。
- 14 下田歌子 (1901)『泰西所見家庭教育』郁文社、pp.153-181。
- 15 下田歌子 (1904)「女子の体育に就きて」帝国婦人協会『日本婦人』第20号、pp.1-4。帝国婦人協会は、下田が欧米視察から帰国後に女子教育と社会事業を目的に創立した団体である。
- 16 下田歌子 (1905)「戦時に於ける女子の體育に就て」『婦人衛生雑誌』第182号、pp.1-12。
- 17 安井先生没後二十年記念出版刊行会 (1965)『若き日のあと：安井てつ書簡集』pp.46-49。
- 18 安井てつ (1898)「女子教育に関する要項」『東京茗溪会雑誌』第185号、pp.1-13。
- 19 ヒューズ (1901)「女子の身躰操練 (上)」『をんな』第10号、pp.1-8。「女子の身躰操練 (下)」『をんな』第11号、pp.1-6。
- 20 ヒューズ (安井哲子訳) (1902)「登山に就て」『婦人衛生雑誌』149号、pp.14-25。
- 21 安井哲子 (1902)「論説 女子の躰育」『をんな』第3号、pp.1-4。
- 22 安井哲子、同上、pp.4-5。
- 23 東京女子大学五十年史編纂委員会 (1968)『東京女子大学五十年史』pp.42-50。
- 24 同上、p.74。

#### 【引用・参考文献】

- 青山なお (1949)『安井てつ傳』東京女子大学同窓会。
- 阿部生雄 (2009)『近代スポーツマンシップの誕生と成長』筑波大学出版会。
- 池田恵子 (2015)「英国における女性スポーツと日本」『現代スポーツ評論』33号、pp.48-59。
- 池田恵子 (2016)「英国女性スポーツ史研究にみるジェンダー空間の分析」『スポーツとジェンダー研究』14号、pp.58-69。
- 大家千枝子 (1995)「明治期における高等女学校の体育の実際に関する史的考察——近代日本の女子体育史研究の一環として」『日本体育大学紀要』25巻第1号、pp.1-13。
- 大野延胤 (1989)「E. P. Hughes in Japan (1901-1902)」『学習院大学文学部研究年報』第36輯、pp.323-346。
- オズボーン、キャロル (2018)「スポーツ史における女性：英国の視点から」『スポーツ史研究』第31号、pp.45-49。
- 香川せつ子 (2011)『女性と身体教育 19～20世紀初頭英国文献集成』(日本語版別冊解説) ユーリカ・プレス。
- 香川せつ子 (2020)「ヴィクトリア時代のスポーツとジェンダー——周縁化された女性たちの戦略」『ヴィクトリア朝文化研究』第18号、pp.161-181。
- 香川せつ子 (2021)「下田歌子と津田梅子——西洋文化との出会いと女子教育の創出」広井多鶴子編『下田歌子と近代日本——良妻賢母論と女子教育の創出』勁草書房。
- 掛水通子 (2018)『日本における女子体育教師研究』大空社。

- 上沼八郎 (1967) 『近代日本女子体育史序説』不昧堂書店。
- 菊池好行 (2004) 「櫻井錠二とイギリス人化学者コネクション」『化学史研究』31巻4号、pp.239-267。
- 木村吉次 (1973) 「ミス・ヒューズによるスウェーデン式体操のすすめ」『中京体育学論叢』14巻1号、pp.1-19。
- 故下田歌子先生伝記編纂所 (1989) 『下田歌子先生傳』大空社。
- 櫻井錠二 (1888) 「女子の體育に就いて」辻岡文助編『高名大家女子教育纂論』金松堂、pp.69-85。
- 坂上康博・中房敏明・石井昌幸・高橋航編著 (2018) 『スポーツの世界史』一色出版。
- 柴沼晶子 (2012) 「イギリス留学で得たもの——安井てつと大江(宮川)スミの場合を比較して」『ジュリスコンサルタス』21号、pp.135-149。
- 下田歌子 (1896) 「欧米二州女子教育實況概要」。
- 下田歌子 (1899) 『泰西婦女風俗』大日本女学会。
- 下田歌子 (1901) 『泰西所見家庭教育』博文館。
- 下田歌子 (1901) 「女子の體育に就きて」帝国婦人会『日本婦人』第20号、pp.1-4。
- 下田歌子 (1905) 「戦時に於ける女子の體育に就て」『婦人衛生雑誌』第182号、pp.1-12。
- 下田次郎 (1904) 『女子教育』金港堂。
- 下田次郎 (1906) 『西洋教育事情』金港堂。
- 女性体育史研究会編 (1981) 『近代日本女性体育史——女性体育のパイオニアたち』日本体育社。
- 曾我芳枝・平工志穂・中村有紀 (2015) 「女性におけるスポーツ・運動実践——東京女子大学の体育を中心として」『東京女子大学紀要論集』65巻3号、pp.1987-1999。
- 高橋一郎・萩原美代子・谷口雅子・掛水通子・角田聡美 (2005) 『ブルマーの社会史——女子体育へのまなざし』青弓社。
- 高橋春子 (1993) 「明治30年代初めの女子体育論とミス・ヒューズによるスウェーデン式体操の推奨」『中京大学体育論叢』34巻2号、pp.15-24。
- 辻直人 (2010) 『近代日本海外留学の目的変容——文部省留学生の派遣実態について』東信堂。
- 津田茂麿 (1928) 『明治聖上と臣高行』自笑会。
- 東京女子大学五十年史編纂委員会 (1968) 『東京女子大学五十年史』。
- 中村敏雄編 (1993) 『スポーツの伝播・普及』創文企画。
- 二階堂トクヨ (1975) 『足掛四年 英国の女學界』学校法人二階堂学園 (東京宝文館、大正6年)。
- 西村絢子 (1978) 「二階堂トクヨの師マダム・オスターバーグ (Madame Bergman Osterberg) の生涯とその女子体育思想」『日本女子体育大学紀要』第8巻、pp.1-23。
- 西村絢子 (1979) 「わが国における近代女子体育の受容と変容——明治・大正期における女子体育留学生 (井口あぐり・二階堂トクヨ・三浦ヒロ) の業績をめぐって」『日本女子体育大学紀要』第9巻、pp.81-92。
- 西村絢子 (1983) 『体育に生涯をかけた女性 二階堂トクヨ』杏林書院。
- ヒューズ, イー・ピー (1901) 「女子の身躰操練 (上)」『をんな』第10号、pp.1-8、「女子の身躰操練 (下)」『をんな』第11号、pp.1-6。
- ヒューズ, イー・ピー (安井哲子訳) (1902) 「登山に就て」『婦人衛生雑誌』第149号、pp.14-25。
- ヒューズ, イー・ピー (1902) 『英国の風俗』(緒方流水訳) 知新館。
- ヒューズ, イー・ピー・ヒューズ/エー・シー・ハーツホーン/本田増次郎 (1902) 『家庭の模範』育成

會。

藤波由美子 (2012) 「女子教育のパイオニア下田歌子の体育奨励について」城戸一彦先生退職記念論集刊行会『体育・スポーツ史の世界——大地と人と歴史との対話』溪水社。

村岡健次 (1987年) 「「アスレティシズム」とジェントルマン——19世紀のパブリック・スクールにおける集団スポーツについて」村岡健次・鈴木利章・川北稔編『ジェントルマン・その周辺とイギリス近代』ミネルヴァ書房。

安井てつ (1898) 「女子教育に関する要項」『東京茗溪会雑誌』第185号、pp.1-13。

安井哲子 (1902) 「論説 女子の体育」『をんな』第3号、pp.1-5。

安井先生没後二十年記念出版刊行会 (1965) 『若き日のあと：安井てつ書簡集』。

\*

Bloomfield, Anne (2006), 'Martin Bergman-Osterberg (1849-1915) : creating a professional role for women in physical training,' *History of Education*, 34-5, pp.517-534.

Burstall, Sara (1907), *English High Schools for Girls : Their Aims, Organization, and Management*, London : Longman, Green, and Co. .

Dove, Jane Frances (1898), 'Cultivation of the Body', in Dorothea Beale, Lucy H.M. Soulsby and Jane Frances Dove (eds.), *Work and Play in Girls' School, Work and Play in Girls' School*, London : Longman, Green and Co. .

Dyhouse, Carol (1976), 'Social Darwinistic Ideas and the development of women's education in England,1880-1920, *History of Education*, 5-1, pp.41-58.

Fletcher, Sheila (1984), *Women's First : The Female Tradition in English Physical Education, 1880-1980*, London : Athlone Press.

Hargreaves, Jennifer (1994), *Sporting Females : critical issues in the history and sociology of women's sports*, Routledge : London and New York.

Hirsch, Pam and McBeth, Mark (2004), *Teacher Training at Cambridge : The Initiative of Oscar Browning and Elizabeth Hughes*, Woburn Press : London.

Ikeda, Keiko (2010), 'Ryosai-kenbo, 'Liberal Education and Maternal Feminism under Facism : Women and Sport in Modern Japan,' *The International Journal of the History of Sport*, 27-5, pp.537-552.

Ikeda, Keiko (2014a), 'From Ryosai-kenbo to Nadeshiko : Women and Sports in Japan', *Routledge handbook of sport, gender and sexuality* edited by Jennifer Hargreaves and Eric Anderson, London and New York : Routledge.

Ikeda, Keiko (2014b), 'British Cultural Influence and Japan : Elizabeth Philipps Hughes' Visit for Educational Research in 1901-1902', *The International Journal of the History of Sport*, 31-15, pp.1925-1938.

Kagawa, Setsuko (ed.) (2012) *Women's Body, Health and Physical Education in Nineteenth to Early Twentieth-Century*, Edition Synapse : Tokyo.

Lundvall, Suzane (2013), 'From Ling Gymnastics to Sport Science : The Swedish School of Sport and Health Science, GIH 1813-2013,' *The International Journal of the History of Sport*, 32-6, pp.789-799.

Mangan, J. A. and Roberta J. Park (eds.) (1987), *From 'Fair Sex' to Feminism : Sport and the*

*Socialization of Women in the Industrial and Post-industrial Eras.*

May, Jonathan, M.Ed., (1968), 'The Bergman-Osterberg Physical Training College', in McIntosh, *Physical Education in England since 1800*, London : G. Bell and S., pp.287-296.

May, Jonathan (1969), *Madam Bergman-Osterberg*, University of London Institute of Education, London : Harrap.

McCrone, Kathleen E. (1986), 'The 'Lady Blue' : Sport at the Oxbridge Women's Colleges from their Foundation to 1914', *British Journal of Sports History*, vo.3, no.2, pp.191-215.

McCrone, Kathleen E. (1988), *Sport and the Physical Emancipation of English Women, 1870-1914*, London : Routledge.

McIntosh, Peter C. (1968), *Physical Education in England since 1800*, London : G. Bell and S.

Scruton, Sheila and Anne Flintoff (eds.) (2002), *Gender and Sport : A Reader*, London and New York : Routledge.

Spencer, Herbert (1867), *The Principles of Biology*→Spencer (1884), Williams and Norgate.

[付記] 本稿は、JSPS 科研費 18K02323, 21H00824 の助成を受けたものです。